

ベルギーにおける言語問題の歴史的背景と ベルギーのフランス語の特徴

金 成 秀 *KIM Song Sou*

ABSTRACT

Since its independence from the Dutch in 1830, Belgium has been faced with a long-standing linguistic conflicts between the French-speaking population and the Flemish-speaking population. In order to settle the linguistic conflicts, Belgium has seen four constitutional reforms of 1970, 1980, 1988-89 and 1993, which have transformed the country from a unitarian state into a federal state.

This paper focuses on the historical background of the linguistic conflicts in relation with the genesis and evolution of the Romance-Germanic language border in Low countries. The paper also aims at an analysis of the peculiarity of Belgo-French.

はじめに

フランス語は世界約30カ国において、公用語、準公用語の地位にあり、国連をはじめとする多くの国際機関においても公用語および作業言語の一つである。現在、世界におけるフランス語話者は約8,000万人と推定される。ベルギーはフランス語圏に属する国で、その首都ブリュッセルはヨーロッパ連合の首都の機能も果たしている。しかし、ベルギーはオランダ語圏、ドイツ語圏にも属する国であるということを忘れてはならない。オランダ語、ドイツ語はフランス語と共にベルギーの公用語である。ベルギーのフランス語話者数は約400万人で総人口の約40%にすぎない。言語的多数派であるオランダ語系住民（フラマン人）は、日常生活においてはオランダ語方言のフラマン語を用いる。しかし、地理的および歴史的にはオランダ語圏に属している首都ブリュッセルでは、フランス語が多数派言語となっている。フラマン人の多くは程度の差はあるがフ

フランス語を話したり解することができる。一方、フランス語系住民であるワロン人達はフラマン語を話さない。少数派言語であるフランス語はオランダ語（フラマン語）に対して20世紀中頃まで優位的地位を保ってきた。そのため、ベルギーはやがて言語紛争による国家存続の危機に陥るようになる。1831年に、「不滅の統一」を誓い成立したベルギー王国は150年後には、言語紛争による国家分裂をさけるため、単一国家から連邦国家への再編成を余儀なくされる。ゲルマン語地域とロマンス語地域を分ける、いわゆる「言語境界線」はまさしく、ベルギーの真ん中を通っている。

本稿ではベルギーの言語問題の歴史的背景とベルギーのフランス語の特徴について考察していく。

1 ベルギーの言語問題の歴史的背景

1.1 ベルギーの言語境界線の基礎

現在のベルギーの領土はローマ時代にはガリアと呼ばれた地域の一部をなしていた。ベルギーが史料にはじめて登場するのは、ガリア全土征服の戦いについて記したカエサルの『ガリア戦記』においてである。その巻一に次のように記されている。

「ガリアは全部で三つに分かれ、その一にはベルガエ人、二にはアクィータニー人、三にはその仲間の言葉でケルタエ人、ローマでガリー人と呼んでいるものが住む。どれも互いに言葉と制度と法律が違う」⁽¹⁾

カエサルがベルガエ族をガリアで最も強い部族と認めたように、ベルガエとはケルト語で「戦士」を意味し「ベルギー」の語源である。ベルガエ族はゴール族やアキテーヌ族とは異なった文化を持つケルトの一部族であると思われる。紀元前6世紀頃に現ベルギー地方に到着したケルト人は、移動の過程でゲルマン人に接触し、彼らと多くの共通性を持つに至った。カエサルが「ベルガエ人の多くはゲルマーニアより出たもの」と記しているように、ベルガエ族の一部は紀元前2世紀にベルギー北部に侵入し、その地に住みついたゲルマン起源を持つ人々である。ベルガエ人はナビイ族、ネルウィ族、アドゥアトゥキ族、エ

プロネス族などの部族に分かれていて、彼らの多くはケルト語の大きな影響を受けたゲルマン語を話していた。⁽²⁾

紀元前51年、ローマに屈したベルガエ族は、ローマの支配下におかれるようになる。ローマの属領となったベルガエ族の領土はガリア・ベルギカ（Gallia Belgica）と名づけられ、そこにはローマの行政制度が導入され次第にローマ化される。帝国の最北端に位置したガリア・ベルギカはローマの防衛にとってとても重要な地域であった。それというのも、ローマはこの地域でライン川を挟んでゲルマニアと対峙していたからである。ガリア・ベルギカは現在のフランス北部からオランダの間に位置し、スイス西部の一部を含んでおり、第一ゲルマニア、第二ゲルマニア、第一ベルギカ、第二ベルギカの四州に分割された。3世紀後半頃から、ベルギー北部地域には労働力不足を補うため移送されたゲルマン人捕虜たちや、ローマ軍の兵隊の数を補充するため徴兵されたゲルマン人が定住していた。彼らは早いうちにローマの言語と文化を受け入れローマ化されたと推測される。この時期、ベルギー北部においては気候的原因によって著しい居住の中断がおこっていた。⁽³⁾無人地帯化したこの地域には、フランク人などのゲルマン人が定着しはじめたが、上述のゲルマン人移住者とは異なり、彼らは自らの言語・文化を保持し続け、その地の言語・文化に同化しなかった。フランク人が定住したのは、その地が後に、フランドルと呼ばれるようになる。4世紀後半、ゲルマン人たちの度重なる侵入により弱体化したローマ人勢力は、ベルギー北部地域を自力で防衛できなくなった。ローマはこの地方を放棄しフランク人に居住の許可を与える代わりに、彼らにフォイデラーティ（同盟者）として帝国北部を防衛させた。ローマの勢力が南部に撤退するにつれ、フランク人の勢力圏は次第にベルギー中部地方（現在のブラバント）までに及ぶようになる。ベルギー北部ではもはやラテン語は話されなくなり、ゲルマン語が主要言語になった。一方、この頃ベルギー南部ではすでにローマ化がかなり進んでおり、ベルガエ人の言語はラテン語化していた。現在のベルギー言語境界線の基礎が形成されるのはまさしくこの時代である。すなわち、ベルギーの北部ではゲルマン語系のオランダ語諸方言、そして南部ではガロ・ロマンス語から分化したワロン語が話されるようになる。

ベルギー北部に定着したフランク人は南部のローマ化したケルト人を Walha という名で呼んでいた。Walha はおそらくガリア南東部地域のガリア・ナルボネンシスに居住していたケルト系の一部族のラテン語呼称 Volcae に由来している。ゲルマン人達がケルト人に対する呼称として用いた Walha は、ガリアが次第にローマ化するにつれ、ロマンス語を話す人々、すなわちガロ・ロマン人を表すようになる。現在のゲルマン諸語にこの名称の派生語がいくつかある。例えば、ドイツ語系スイス人はフランス語系スイス人を die Welschen と呼ぶ。また、英語の Wales はケルト人が自らの言葉でカムル (Cymru) と称する地域を指すが、これは古英語の Wealh に由来する。Welschen, Wealh は共に Walha の派生語で「理解できない言語を話す」という意味である。

ベルギー南部地域のロマンス語系住民は、Walha の派生語 Wallon (中世ラテン語の Wallo) を自らの名称として用いるようになる。

1.2 低地地方の統一と分裂

476年にローマ帝国が滅亡すると、低地地方はフランク王国に組み込まれる。カール大帝 (742-814) はドイツの北からローマ、ピレネに至る地域を統一する。彼の死後帝国の統一は長く続かず、843年のヴェルダン条約によって西フランク、東フランク、ロタリングアの三つに分割される。この分割は言語、文化の共通性に基づくものではなく、政治的事情によるものであった。そのため、フランドルとアルトワは西フランク (後のフランス)、そしてその他の低地地方はロタリングアに属するようになった。その後メルセン条約 (870年) によって、フランドルを除く低地地方南部の大半は東フランク (後の神聖ローマ帝国) の領土となった。フランドルは絶えずフランスの強い影響下におかれ、ゲルマン語 (オランダ語) とロマンス語 (フランス語) がぶつかりあう地域となった。この地方では、12世紀頃すでにフランス語で文書が作成され、13世紀末にはフランス語話者のコミュニティが存在した。⁽⁴⁾

中世末から近世のはじめまで群小国家状態にあった低地地方は、15世紀初頭リエージュ司教領を除き、フランス系のブルゴーニュ公国によって一つにまとめられる。この頃、低地地方においては、ゲルマン語系話者がロマンス語系話

者に比べ、圧倒的多数派であった。フィリップ善良公(1430-1467)の時代、低地地方はゼーラントからルクセンブルクに至る11州に統一された。1419年、彼は宮廷をフランスのディジョンからブラバント公爵領のブリュッセルに移した。これはオランダ語都市ブリュッセルが、その後次第にフランス語化するのに重要な意味をもつ出来事であった。ブルゴーニュ公国の宮廷貴族や官僚そして上級聖職者たちはフランス人で占められ、宮廷での使用言語はフランス語となった。この時期から宮廷貴族、官僚たちに影響され、地方貴族たちも次第にフランス語を話すようになっていく。当時、上流階級では子供たちにフランス人家庭教師をつけ、フランス語を習わせるのが慣習になっていた。しかし、フランス語化はごく一部の上流階級に限られており、大多数の住民たちにその影響が及ぶことはなかった。一般住民は依然としてオランダ語方言話者であり、封建領主たちは領民をオランダ語(方言)で統治していた。

1477年、シャルル勇胆公の死後、娘のマリー・ド・ブルゴーニュがハプスブルグ家のマクシミリアン1世と結婚し、低地地方はハプスブルグ家の支配下に入る。マリーが死ぬと、夫のマクシミリアンはブルゴーニュ家を相続し、低地地方はオーストリア・ハプスブルグ家の領土となった。マクシミリアンの息子フィリップ美男王は、婚姻と相続により低地地方の君主にしてスペイン王、そしてハプスブルグ家の推定相続人となった。1506年にフィリップ美男王がなくなると、当時6歳であったヘント生まれのカールが低地地方を相続した。彼はやがてスペイン王となり、1519年には神聖ローマ帝国の皇帝となった。カール5世の治世下、ヘルデラント公爵領、ズットフェン伯爵領が併合され低地地方の統一が完成した。その後、これらの諸州を低地地方17州と呼ぶようになる。カール5世は低地地方17州が不可分で、将来多数の継承者によって分割されることのないよう、相続に関する勅令を出した。

カール5世が1556年に退位すると、ハプスブルグ家はオーストリアとスペインの両家に分かれ、息子のフェリペ2世が低地地方とスペインを相続した。フェリペ2世の暴政は低地地方に大きな受難をもたらした。フェリペ2世はそれまで認められていた都市の自治を破壊し、スペイン型中央集権体制の導入を企てた。当時、北部ではプロテスタントが大きな勢力となり、南部はカトリック

が優勢であった。フェリッペ2世はプロテスタントが支配的であった北部で異端審問を強化し、北部のプロテスタントを徹底的に弾圧した。1568年、エグモント、ホールらプロテスタントの有力諸侯がブリュッセルの大広場で首を切られ、低地地方は恐怖に包まれた。この処刑をきっかけに、スペインに対抗する「80年戦争」（1568-1648）が始まった。プロテスタントの北部7州は同盟を結び、スペインとの戦争で一進一退を繰り返し、1600年頃までにオランダ連邦共和国が成立する。1648年1月「ミュンスター条約」により、スペインとの戦争に終止符がうたれ、共和国の独立が承認された。一方、カトリックが支配する南部諸州は、スペインに忠誠を誓ったため、低地地方は南北に完全に分裂した。南部諸州はその後、スペイン領低地地方と呼ばれ、北部諸州と区別されるようになる。この南北分裂により、その後長期間にわたり、オランダ語の統一的發展の道が閉ざされる。オランダでは言語の標準語化が行われ、文化言語としての地位を確立するが、ベルギーでは諸方言のなかで標準語の基礎を形成する権威言語が存在せず、散り散りの方言として残った。ベルギーのオランダ語方言は、上流階級の言語であるフランス語の多大な影響を受け、フランス語の語彙を数多く借用するようになる。「80年戦争」以降、ベルギーにおけるフラマン語の地位はさらに弱まり、フランス語がベルギーの唯一の文化言語、上流階級の言語とみなされた。フラマン人貴族、ブルジョア階級はますますフランス語化していき、特に、上流階級の女性達はフラマン語を「遅れた言語」と見下し、フランス語を好んで使うようになった。17世紀を通じて、低地地方南部の全州でフランス語の地位が緩やかに上昇していった。

1713年、スペイン領低地地方はオーストリア・ハプスブルグ家の支配下に組み込まれたが、オーストリアがフランス語を引き続き「公用語」に採用したため、フランス語の支配言語としての地位は揺るがなかった。ブリュッセルやアントゥワープなどの諸都市にフランス啓蒙思想が伝播され、フランスの言語と文化が絶大な影響力をもつに至った。この頃、ブリュッセルのモネ劇場（現在の王立歌劇場）で上演されるのはほとんどがフランス語の作品で、発行される新聞の大半がフランス語版であった。フランドル人の弁護士フェルローイ（Verlooy）は1788年に発表した“Verhandeling op d'onact Moederlyke Tael in

de Nederlanden”で、ブリュッセルでは「フラマン語が無視されているばかりではなく蔑まれており、文化教養人ですらまともなフラマン語を話せないでいる」現状を嘆き、フラマン語の復興を訴えている。⁽⁶⁵⁾

ブリュッセルにおいては、フラマン人上流階級および中流階級の多くはフランス語とオランダ語方言の二言語話者であった。当時、ブリュッセルでは人口の約15%がフランス語話者であったと推定される。⁽⁶⁶⁾他方、大多数の下層住民は依然としてオランダ語方言話者であった。彼らは政治、経済、文化、教育などあらゆる分野で疎外されており、フランス語化の対象にならなかった。そのため、彼らにとっては「言語問題」はまだ存在せず、フランス語化に対して大きな反感を抱くことはなかった。

1789年7月にフランス革命が起こると、ベルギーでも革命の機運が高まりオーストリアに対抗する「ブラバントで革命」が勃発した。1790年1月に、全国議会（三部会）はアメリカ合衆国の連邦制にならって「ベルギー合衆国」をつくり独立することを宣言した。一方、リエージュ司教領でもブルジョアジーを中心に革命が起こった。この二つの革命の勝利は短く、再び旧体制に戻ることになる。

1792年4月、オーストリアに宣戦を布告したフランスは1794年戦争に勝利し、1795年10月、旧オーストリア領低地地方とリエージュ司教領などをフランスに併合する。フランスは行政、法廷、教育などの分野でオランダ語の使用を禁じ、フランス語の普及のために、各カントンに一つの小学校、そして各県に一つの中学校を設置した。これらの学校で教育を受けるのは下層住民の子弟ではなく、上流階級やブルジョアジーの子弟に限られていた。1806年には、道路名を示す標識をフランス語で記すという法令が出され、1810年以降、ベルギーのフランス化を強力に押し進めるため、フラマン人貴族の娘たちとフランス人の将校、役人たちとの結婚を奨励し、エリート層の子弟をフランスの学校で学ばせる政策を採った。このようなフランス語同化政策は、ベルギーに二つの異なる結果をもたらせた。上流階級はより一層フランス語化されていき、中流階級は自らの社会的昇進を獲得するためフランス語化を受け入れた。しかし、大多数の下層住民にはフランス語化が及ばず、彼らはむしろ反フランス語感情を抱く

ようになった。

1815年6月、ナポレオン軍がワーテルローでの戦いで敗北した後、ウィーン会議での決定に従い旧オーストリア領低地地方、リエージュ司教領およびオランダを一つにまとめたオランダ王国が誕生した。後にベルギー領土となる地域はゲルマン語圏のフラマン地域とロマンス語圏のワロン地域によって構成されていた。この新しい王国においては、オランダ語がフランス語に対して使用人口的には著しく優勢であったが、フラマン地域の upper class の人々はオランダ語ではなくフランス語を好んで使っていた。また、宗教に関してはオランダはプロテスタントであったが、旧オーストリア領低地地方はカトリックであった。

国王ウィレム一世はオランダ語を王国の公用語に定めるが、教育、司法、行政などにおいてフランス語が排除されることはなかった。ウィレム一世をはじめとする王一族はフランス語話者であり、フランス語が upper class の言語であったため、実質的にはフランス語の地位が脅かされることはなかった。

1819年9月15日の法令はフランス語をワロン地域における公用語と定め、フラマン地域においては、オランダ語を唯一の公用語と認め、1822年からはオランダ語がワロン地域を除く王国領において公用語となった。ブリュッセルをはじめとする旧低地地方の upper class は聖職者達（大多数がフランス語系）やブルジョアジー、官吏、フランス語系に同化したフラマン人などのフランス語話者で構成されていた。フランス語系ブルジョアジーは啓蒙思想の影響を受け、ウィレム一世の中央集権的政治に反感を抱いており、保守的聖職者達は国王の反カトリック的姿勢に不満を持っていた。彼らにとってオランダ語は「文化的に遅れた言語」であり、プロテスタンティズムの布教に用いられる「反カトリック言語」であった。そのため、思想理念が異なるにもかかわらず、フランス語系リベラル派と保守的聖職者は反オランダに関して利害が一致し、互いに手を結んでウィレム一世に反旗を翻すようになる。

1.3 単一国家から連邦国家へ

1.3.1 ベルギーの独立

1830年にフランスで起きた「7月革命」は、瞬く間にフランドレン地域とワ

ロン地域の社会運動に影響を及ぼした。同年8月25日、ブリュッセルのモネ劇場でスペイン人の圧制に対して立ち上がったナポリ人を題材にした、オペラ『ポルティチの口の利けない女』が上演された後、反政府デモが自然発生的に起きた。この出来事をきっかけに各地で反乱が繰り返された。当局はブリュッセルにオランダ軍を派遣するが、反乱を抑えることができず撤退を余儀なくされる。

10月4日、反オランダ運動の先頭に立ったブリュッセルの上流階級は暫定政府を樹立し、フラマン地域とワロン地域をオランダから分離させ新たに独立国家を形成することを宣言した。11月3日、人口の1%にも満たない約3万人の有権者によって国民議会が選出された。11月4日、ロンドン会議において、オーストリア、フランス、イギリス、プロシア、ロシアなど周辺5大国はフランドレン地域とワロン地域がオランダから分離独立することを承認した。国民議会は1831年2月7日、ベルギー国憲法を可決した。6月4日に国民議会において国王に選出されたドイツ出身のザクセン・コープル・ゴータ公は、同年7月21日、憲法への忠誠を誓約し、レオポルド一世（在位1831-65）の名でベルギー初代国王に即位した。

新生ベルギーは、ワロン地域とフラマン地域という異なった二つの言語・文化共同体からなる単一国家として出発した。独立をきっかけに、それまで共存してきたワロン人とフラマン人が、言語問題を巡り敵対するようになる。

国民議会を選出した有権者数の大多数は、フランス語系の貴族およびブルジョアジーであった。そのため、フラマン語が排除されフランス語が新生ベルギーの唯一の公用語と定められた。このような言語不平等政策は、遠からずフラマン人達の民族意識を覚醒させ、ワロン人とフラマン人の対立を生み、国家統一が絶えず不安定を引き起こす要因となった。言語問題に端を発する二つの民族コミュニティの対立関係は、当事者達によってつくられたのではなく、ブリュッセルの中央政府を支配する上流階級によってもたらされた。何故なら、大多数のワロン人達は有権者資格を持っていなかったのであるから。建国当初のベルギーの言語状況をみればこのことがよく分かる。首都ブリュッセルばかりではなく、フラマン地域のヘント、ブリュッヘ、アントウェルペンなどにおいても、

上流階級の言語はフランス語であった。したがって、ベルギーの政界、教会、教育、企業などの主要な役職は、フランス語話者によって占められていた。一方、ワロン地域ではオランダ統治時代にすでにフランス語がこの地域の公用語であったため、リエージュなどの都市部ではフランス語を話す社会層が早くから存在した。しかし、農村地帯ではほとんどの人がフランス語を解さず、ワロン方言、ピカルディー方言、ナミュール方言などが支配的であった。大多数のワロン人にとって、フランス語は母語ではなく一種の「外国語」にすぎなかった。また、フラマン地域の大多数の人々はオランダ語諸方言を使用していた。言語の標準化をいち早く推進したオランダとは異なり、フラマン地域においては言語の標準化が行われず、フラマン方言、リンブルフ方言、ブラバンスン方言などが話されていた。つまり、この時期、フランス語を話すことは、その話者が属社会階級を示すものであり、民族を表していなかった。

独立運動を指導したフランス語系上流階級は、国家的統一を促進するためには言語の統一を最も緊要な課題と見なし、フランス語を唯一の公用語と定めた。独立憲法においては「使用言語の自由」が認められていたが、それは個人レベルでに限定されていた。上流階級は「遅れた言語」であるフラマン語に対する蔑視を顕わにし、フラマン人をフランス語に同化させる言語政策を採った。フラマン地域ではフラマン語による初等教育が実施されたが、中・高等教育はフランス語でしか行われなかった。当時、ベルギーの主要産業はワロン地域に集中しており、フラマン地域は貧しい農村地帯であった。このような、社会的状況において、フラマン語は貧困と社会的劣等の象徴となり、フランス語を話すことが社会的昇進の必須条件となった。そのため、中流階級に属するフラマン人達は、社会的昇進を目指し、次第に上流階級に倣ってフランス語を学ぼうとした。ワロン地域においても、フランス語の拡張が急速に進み20世紀初頭にはワロン語一言語使用人口が著しく減少し、ほとんどがワロン語とフランス語の二言語話者になっていた。

1.3.2 言語紛争の顕在化

中央政府のフランス語化政策に異議を唱え、抑圧されたフラマン語の純化と

復興の先頭にたつのはロマン主義の影響を強く受けた文学者、文献学者、民俗学者などのフラマン知識人である。彼らは「フラームス運動 *Vlaamse Beweging*」という考えを生み出した。ヘンドリック・コンジャンスは、フラマン人がフランス軍に勝利した1302年の「黄金拍車の戦い」を描いた『フランドルの獅子』(*De Leeuw van Vlanderen*, 1838) を世に出し、フラマン人の民族意識を高揚させた。また、文献学者のヤン・フランス・ウィレムスはフラマン語とフランス語の言語的平等を主張した。「フラームス運動」に触発され1840年には、フラマン人の最初の言語的要求が公然と提起された。それはフラマン地域での行政業務をフラマン語で行うということであった。1847年には、彼らは、フラマン地域のすべての中・高等学校でオランダ語教育を実施することを要求した。1860年、彼らは「我々の権利と一緒にベルギー、もしくはベルギーが無くても我々の権利」というスローガンをうち出す。この時期から、フラマン人達は、フラマン地域においてはオランダ語・フランス語の併用ではなく、オランダ語一言語主義を要求するようになる。1873年、ベルギーで最初の言語に関する法律が国民議会で可決された。それはフラマン地域の法廷でオランダ語の使用を認めるというものである。1878年、すべての行政布告、法令をフランス語とオランダの両言語で発布することを規定する法律が制定され、1883年には、中等教育においてオランダ語の使用が認められた。1893年の普通選挙法の成立は、「フラームス運動」が政治的力を持つ運動へと転換するのに重要な意義をもつ出来事であった。1894年10月の選挙でフラマン人たちは、自分たちの言語文化的権利を強力に擁護する代表を国民議会に選出した。1898年には、いわゆる「言語平等法」が制定され、オランダ語はフランス語とならぶベルギーの公用語となった。しかし、この「言語平等法」はワロン人およびフランス語化した上流階級のフラマン人の抵抗にあい、長い期間、部分的にしか守られなかった。したがって、フランス語の実質的優位は変わらなかったが、ベルギーにおける二言語主義の原則がはじめて法的に承認されたと言える。二言語主義の導入以降、「フラームス運動」に対抗する「ワロン運動」*le mouvement wallon* が起こる。この運動は主にワロン地域ではなく、主に首都ブリュッセルで繰り広げられた。行政機構には非常に多くのワロン出身の官僚たちがいた。彼らは二言

語主義導入に伴い、自らの特権的地位が脅かされることを恐れた。「ワロン運動」を主導し、フラマン語の公用語化に反対する運動を繰り広げたのはまさしく彼らであった。大多数のワロン人たちは言語紛争に大きな利害関係を持たず、当初この運動にほとんど関心を示さなかった。ワロンでこの運動が一般大衆の支持を得るのは、カリスマ的指導者である社会党選出上院議員、ジュール・DESTRE *Jules Destré* が政治舞台に登場してからである。彼によって「ワロン運動」はごく少数の特権階級の運動から大衆的運動への転換期を迎えるようになる。「フラームス運動」と「ワロン運動」は次第にそれぞれの地域の独立を目指すようになる。まさしくそのような状況において、ベルギーの連邦化がDESTREによってはじめて公然と提起され、政治問題化されるようになる。1912年、DESTREは、雑誌『ベルギー評論』*Revue de Belgique* に投稿した有名な「国王宛の手紙」の中で次のように述べている。「あなたは二つの臣民を統治しておられます。ベルギーにはワロン人とフランドレン人がおり、ベルギー人はいません」⁽⁶⁾彼は「自由で独立した二つの臣民の連合からなる一つのベルギー」*une Belgique faite de l'union de deux peuples indépendants* を国王に進言し手紙をしめくくった。

第一次大戦中、ベルギーを占領したドイツ軍の庇護下、「フラームス運動」はフラマン地域のフラマン語化を強力に押し進めた。1916年にヘント大学がフラマン語化され、1917年3月にはベルギーは行政的にワロン地域とフランドレン地域に分離された。1921年、ベルギー政府は北部のフラマン語地域、南部のフランス語地域、ブリュッセル二言語地域など三つの言語地域を設定する。しかし、この時の言語地域の設定は、フランス語優位を保持する性格が著しく、決してフラマン人たちを満足させるものではなかった。

北部のフラマン語地域では、少数派であるのフランス語系住民の言語的権利が認められた。その一方、南部のフランス語地域は数多くのフラマン人を抱えていたにもかかわらず、彼らの言語的権利は認められなかった。さらに、ブリュッセルは歴史的にフラマン地域に属し、住民の大半がフラマン語話者であったが、二言語併用地域となった。フラマン人達は、一地域一言語主義の原則をフラマン地域において完全に実施することをもとめた。1932年7月14日、各地域住民

の言語使用に関する調査（1930年実施）に基づきオランダ語がフラマン地域の公用語、フランス語がワロン地域の公用語と法的に制定される。つまり、一地域一言語の原則が法的根拠に基づき実施されるようになった。さらに、1935年には司法、1938年には軍隊に関して、一地域一言語主義に基づく言語法が制定された。ただし、言語境界線地域および言語少数派が人口の30%以上を占める自治体においては二言語主義を原則とした。

ブリュッセルは二言語地域であったが、フランス語系人口の増加に比例しオランダ語系住民人口の割合が減少し、オランダ語の通用力はいっこうに強まらなかった。そればかりか、地域言語使用が任意規定にとどまったため、フラマン地域においてもフランス語の優位は変わらなかった。

1.3.4 連邦国家の誕生

1960年代に入ると、ベルギーでは言語紛争が以前にまして大きな政治問題となった。言語問題に起因する国家分裂を回避するため、ベルギーは単一国家から連邦国家への国家再編を模索するようになる。

第二次大戦前に制定された様々な言語法を徹底的に実施し、フラマン地域とワロン地域、ブリュッセル地域とフラマン地域の言語境界線を最終的に確定することが重要課題となった。この時期、ドイツと隣接する東部州（ワロン地域）に居住するドイツ語話者のため、ドイツ語をベルギーの三つ目の公用語とすることが決定された。1962年11月8日に制定され、翌年9月1日から実施された言語境界線に関する言語法により、オランダ語地域、フランス語地域、ブリュッセル二言語地域、ドイツ語地域など4つの言語地域が確定した。言語境界線確定のために行われた言語調査に基づき、24のコミューンがワロン地域からフラマン地域に再編成され、25のコミューンがフラマン地域からワロン地域に組み入れられた。また、言語少数派が人口の30%を越える境界線地域のコミューンでは、言語少数派に「特別保護措置」（le régime linguistique spécial）が適用された。しかし、この言語法の実施過程では様々な問題が生じた。言語境界線の連続性を保つためフランス語系住民が3分の2を占めるフーロン *Fouron* がオランダ語地域に組み入れられたりオランダ語形地域へのフランス語系住民

の流入を防ぐため、ブリュッセル近郊のオランダ語地域では「特別保護措置」の条件が厳格に定められた。

オランダ語地域にあるルーヴェン・カトリック大学では、それまで認められていたフランス語による講義・研究が一地域一言語主義を根拠に禁止された。これをきっかけに、1965～68年の「ルーヴェン・カトリック大学問題」が起り、フランス語部門はワロン地域のオッチーニ市に分離移転しフランス語のルーヴェン大学を開校した。さらに、政党、労働組合なども言語に基づき再編されるようになり、ベルギーは単一国家から連邦国家への道を実に進んでいった。

連邦国家への移行過程において、フラマン人達とワロン人達が、連邦性に関して互いに異なる概念を抱いていたことが明らかになる。前者がブリュッセルのオランダ語系住民を含むすべてのオランダ語系住民の完全なる言語・文化的自治の確立を目指したのに対し、後者はブリュッセルのフランス語話者との文化的つながりを強めつつ、経済的に衰退していたワロン地域において独自の社会経済政策を遂行するのに重点を置いた。このような両共同体の異なる要求を最大限に満たすために、1970年から1993年の間に4回にわたる憲法改正が行われた。その結果、1993年4月に上下両院において連邦化に関する35項目の憲法改正案が可決され、翌年、言語・文化的同一性に基づく「共同体 *Communauté*」と独立した経済的単位を構成する「地域 *Région*」が並立的に存在する連邦国家が誕生した。

1977年に、ブリュッセル首都地域、フラマン地域、ワロン地域に自治権が与えられ、ベルギーは三つの行政府に分割された。この分割は1980年の憲法改正によって承認され、ベルギーは単一国家から連邦国家となった。この国の政治制度は他のヨーロッパ諸国に比べ複雑で、三つのレベルの権限主体から成っている。つまり、三つの自治地域、言語の同一性に基づく三つの共同体、四つの言語地域である。それぞれの地域と共同体は自らの議会を持つが、フラマン地域とフラマン共同体はそれぞれの議会及び政府が統合されている。

1. ベルギー連邦政府と両院議会、
2. ワロン地域政府と議会、
3. フランス語共同体政府と議会、
4. フラマン地域及びフラマン共同体政府と議会、
5. ドイツ語話者共同体政府と議会

三つの自治地域

ベルギーの連邦を構成する三つの自治地域 (la Région) とは、フラマン地域、ワロン地域、首都ブリュッセル地域である。フラマン地域はベルギー北部に位置しており、西フランドレン県、東フランドレン県、アントウェルペン県、リンブルフ県、フランドレン・ブラバント県などのオランダ語地域を包括している。この地域にはベルギー総人口の57.6%にあたる約590万人が居住している。

ワロン地域はベルギーの南部に位置し、ベルギーの総面積の約55%を占めており、総人口の約32.4%を占める約330万人がこの地域に居住している。この地域はエノー県、ワロニー・ブラバント県、ナミュール県、リエージュ県、リュクサンブール県など五つの県で構成されている。リエージュ県には九つのコミューンから成るドイツ語圏地域がある。ワロン地域の首都はナミュールである。

首都ブリュッセル地域には、ベルギー総人口の約9.3%の96万人が居住している。ブリュッセルは連邦政府の首都であると同時にフラマン地域、フランス語共同体そしてヨーロッパ連合の首都である。ブリュッセルはフランドレン・ブラバント県に囲まれており、地理的にも歴史的にもフラマン地域に位置しており人口のほとんどがフラマン人である。しかし、首都人口の約70%がフランス語話者でありオランダ語系住民は約10%に過ぎない。残りの約20%を構成するのは外国人労働者やブリュッセル駐在する外国人国際公務員であるが、彼らのほとんどが母語 (もしくは仕事の言語である英語) 以外の言語としてオランダ語ではなくフランス語を選択している。

三つの共同体

1970年の憲法で言語と文化の同一性に基づく、三つの「文化共同体」、つまりオランダ語共同体、フランス語共同体、ドイツ語共同体がつくられた。しかし、1980年の憲法改正によって、三つの「文化共同体」の名称は、「フラマン共同体」*de Vlaamse Gemeenschap van België*、「フランス語共同体」*la Communauté française de Belgique*、「ドイツ語話者の共同体」*die Deutschsprachige Gemeinschaft Belgiens* と変更された。これらの名称変更

には各共同体が抱く共同体に関する概念の違いとそれぞれの共同体が背負ってきた歴史的背景が色濃く反映されている。当初、フランス語共同体は *la Communauté des Francophones* 「フランス語話者共同体」を提案するが、「Francophones」という語が単にフランス語話者を指すのではなく、それ以外の要素が含む恐れがあるという理由でフランドレン人達によって拒否された。フラマン人と妥協しフランス語共同体が採用したのは *la Communauté française de Belgique* であるが、この名称は形容詞「française」が「フランスの」と解釈されるため「フランスの共同体」という印象をあたえる恐れがある。一方、オランダ語共同体が新たに採用した名称にも、この共同体が歴史的に抱える複雑な言語および文化的アイデンティティ問題が反映されている。フラマン人達の言語であるフラマン語はオランダ語の一方言であり、ベルギーの公用語としては存在しない。そのため、「フラマン語共同体」という名称を用いることができなかった。しかし、オランダとは異なった独自の文化を築きあげてきたフラマン人達は、オランダと混同される恐れのある「オランダ語話者共同体」とするのを望まなかった。彼らは言語ではなく民族を表す名称である「フラマン共同体」を選択することにより、民族主義的性格を固守した。また、ワロン地域に居住するドイツ語話者達は、他の二つの共同体と同様のカテゴリーを自らの共同体名称に用いると「ドイツの共同体」という印象を与える恐れがあるため、「ドイツ語話者共同体」という名称を採用した。このことにより、彼らがベルギーを構成する一共同体であるということを明確にした。⁽⁷⁾

これらの共同体のうち、「フランス語共同体」*la Communauté française* はワロン地域とブリュッセルのフランス語話者 *les Francophones* で構成される。ブリュッセルのフランス語話者の多くは本来、フランス語系に同化したフラマン人である。「フラマン共同体」はフラマン地域とブリュッセルのオランダ語系住民で構成される。ドイツ語共同体はワロン地域のリエージュ県に属する9つのコミューンに居住する約7,000人のドイツ語話者で構成されている。

四つの言語地域

ベルギー連邦は言語政策において属領性（territorialité）の原則を採用し

ており、四つの言語地域に分かれている。そのうち三つの地域では一言語主義を実施している。ワロン自治地域は東部のドイツ語地域の除き、フランス語地域である。フラマン自治地域はオランダ語地域であり、ワロン地域のリエージュ県の9つのコミューンはドイツ語地域である。首都ブリュッセル地域は、フランス語とオランダ語の二言語地域である。言語の属領性、首都ブリュッセル地域の二言語公用語政策などは、ベルギーを構成する二大言語集団が長い期間にわたり模索してきた「歴史的妥協」の結果として生まれたものである。

2 ベルギーのフランス語の特徴について

ベルギーのフランス語の特徴を一言で表すのに、ベルジシスム (Belgicisme) という言葉がよく使われる。ベルジシスムとは、音韻と音声、形態と統語、語彙と表現、などにおけるフランスのフランス語と異なる、ベルギーフランス語の特徴を意味する。

ベルギーのフランス語話者の約80%がワロン地域に居住している。ワロン地域はオイル語がゲルマン語と最も密接に関わりあってきた地域である。そして、約20%のフランス語話者が居住するブリュッセルは、20世紀初頭までフラマン語話者が人口の大半を占めていた都市である。このようなことから、ベルギーのフランス語の特徴が、ワロン地域の諸方言とフラマン語などの基層語に密接に関連しているということが分かる。そのようなことをふまえ、ここではベルギーのフランス語の特徴 (ベルジシスム *belgicisme*) について、音韻と音声、形態と統語、語彙と表現の面から簡単に述べていく。後述する様々な特徴は、絶対的なものではなく傾向を示すものである。ベルギーとバリの教養ある人の発音がそれほど違わなかったり、ある表現がフランスの地域、もしくは一定の社会階層のそれと同じであることもある。また、地方によって、それらの特徴が濃厚であったり、あまり顕著でないこともある。書き言葉と話し言葉によっても、特徴のあらわれかたが異なることはいうまでもない。

1 音韻と音声

フランス語のアクセントは、一つの単語を単独で発音するときは単語の語末音節に、そして、文中においては語群の最後の音節に置かれる。ベルギーのフランス語〔FB〕ではフラマン語の影響を受け、アクセントがフランスのフランス語〔FF〕よりやや強く、そして語頭の音節に置かれる傾向がある。口腔母音〔e〕、〔o〕、〔ø〕と鼻母音〔ɛ̃〕、〔ā〕、〔ɔ̃〕、〔œ̃〕はアクセントの有無にかかわらず、一般的に長く発音される。例えば、*Elle est toute blanche de peur*の文においては、標準フランス語では *peur* にアクセントが置かれこの語だけが長く発音される。しかし、ベルギーのフランス語では、*blanche* の〔ā〕も長母音になる。このように、長く発音される母音、半母音が多くあるため、ベルギーのフランス語がゆっくり間のびしているように聞こえる。また、調音に際してフランスのフランス語に比べて筋肉緊張度が弱く、〔i〕、〔y〕、〔u〕などの母音がより開音になる。

a. 母音

—ベルギーのフランス語（FB）の音韻体系には半母音〔ɥ〕が存在せず、この音は半母音の〔w〕、もしくは母音の〔y〕と同じように発音される。

FB	FF	FB	FF
lui [lwi]	[lɥi]	nuage [nyɑ:ʒ]	[nɥɑ:ʒ]
puis [pwi]	[pɥi]	tuer [tye]	[tɥe]

—フランスのフランス語（FF）では、前方母音の〔a〕と後方母音の〔ɑ〕は、一部の人（特にパリの人）を除き、発音の違いがなくなり、*patte* [pat] と *pâte* [pa:t] を [pat] と発音する。ベルギーのフランス語（FB）では、ワロン地域の西部（トゥルネー・ムスクロン）を除き軟口蓋音の〔ɑ〕があまり広まっていないため、音色 *timbre* ではなく主に長さによって *patte* [pat] と *pâte* [pa:t] の区別をする。

FB	FF
pal [pal]/pâte [pa:l]	pal [pal]/pâte [pal]

ベルギーにおける言語問題の歴史的背景とベルギーのフランス語の特徴 (金)

mal [mal]/mâle [ma:l]

mal [mal]/mâle [mal]

—広い [ɛ] と狭い [e] の違いが安定している。フランスのフランス語では、特に民衆の発音において、piquet [pike] と piqué [pike] の区別が曖昧になり、どちらも [pike] と発音する傾向がある。しかし、ベルギーのフランス語では、広い e と狭い e をはっきりと区別し、piquet [pike] と piqué [pike] と発音される。

FB

été [ete]/était [ete]

téléphone [telefɔn]

FF

été [ete]/était [ete]

téléphone [telefɔn]

—フランスのフランス語では [ɔ] と [o] の違いがなくなる傾向にあるが、ベルギーのフランス語ではこの違いはどの位置においても安定している。

sole [sol]/saule [sol], sot [sɔ]/seau [so], fosse [fɔs]/fausse [fos]

—母音の長さによって同音語の組を区別する。

FB

ami [ami]/amie [ami:]

hout [u]/houe [u:]

perdu [perdy]/perdue [perdy:]

mètre [metr]/maître [mɛ:tr]

FF

ami [ami]/amie [ami]

hout [u]/houe [u:]

perdu [perdy]/perdue [perdy]

mètre [metr]/maître [metr]

—鼻母音 [ɛ̃] と [œ̃] の違いが安定している。フランスのフランス語ではこの違いがなくなり同じように発音する傾向がある。

FB brin [brɛ̃]/brun [brœ̃]

FF brin [brɛ̃]/brun [brɛ̃]

—ワロン地域の東部地方では口蓋母音と鼻母音の違いが不安定である。そのため、同音語の組となる語彙グループは長さにより意味の違いを表す。

bon [bo:]/beau [bo]

pain [pe:]/paix [pe]

b. 子音

—語末もしくは音節の最後の有声子音が無声化する傾向がある。この時、無声子音となる子音の前にある母音が長く発音されることにより、同音語の組が発生するのを避ける。

vite [vit]/vide [vi:t]	bac [bak]/bague [ba:k]
bref [bRɛf]/brève [bRɛ:f]	visse [vis]/vise [vi:s]
bouche [buʃ]/bouge [bu:f]	douce [dus]/douze [du:s]

—一部の地域では、主に年配の人々によって、語頭に位置する有音の h が発音される。

hêtre [hetr]/être [etr]	haine [hen]/aine [ɛn]
-------------------------	-----------------------

2 形態と統語

ベルギーのフランス語は、基層語（ワロン語やフラマン語）の影響をうけて、形態および統語の面でフランス語の規範と異なる例が多くみられる。

—付加形容詞の位置

フランス語の規範では、付加形容詞は実詞の後に付くのが一般的である。しかし、ベルギーのフランス語では、実詞の前に付く例が多くみられる。これはおそらくワロン方言（フラマン語）の影響だと思われる。フランスにおいても北部や東部などゲルマン語地域と隣接する地域では、付加形容詞が実詞の前に付く例が少なくない。

FB	FF
une <i>propre</i> culotte	une culotte <i>propre</i>
du <i>sale</i> linge	du linge <i>sale</i>
une <i>blanche</i> chaussure	une chaussure <i>blanche</i>
un <i>noir</i> ongle	un ongle <i>noir</i>

—前置詞の用法

à

FB

aller *au* médecin
Il porte son fils *à* bras
compote *aux* pommes
mettre *à* place
causer *à* quelqu'un

FF

aller *chez* le médecin
Il porte son fils *dans* ses bras
compote *de* pommes
mettre *en* place
causer *avec* quelqu'un

après

FB

Il y a de la boue *après* votre robe.
Elle essuie ses mains *après* l'essuie.
Il a bu une pintje *après*.

FF

Il y a de la boue *sur* votre robe.
Elle essuie ses mains *à* (*avec*) l'essuie-main.
Il a bu un verre de bière en plus.

avant

Tu marches *avant* moi. (FB)

Tu marches *devant* moi. (FF)

dans, sous, sur

FB

On se promène *dans* le soleil.
Qu'est-ce que tu as *dans* tes pieds?
dix degrés *sous* zéro
Il s'est fâché *sur* moi.

FF

On se promène *au* soleil.
Qu'est-ce que tu as *à* tes pieds?
dix degrés *au-dessous* de zéro
Il s'est fâché *avec* moi.

de

FB

Elle vient *de* pied.
Je ne peux pas sortir *de* ma mère
Il aime *de* se promener.

FF

Elle vient *à* pied
Je ne peux pas sortir *à cause de* ma mère.
Il aime se promener. (前置詞なし)

pour

FB

Ce stylo est bon *pour* jeter.

Il est en deuil *pour* son père.

FF

Ce stylo est bon à jeter.

Il est en deuil *de* son père.

— 接続法が直説法になる傾向がある。

Je ne peux pas lui répondre bien que je le *sais* (sache)

Nous sommes contents que vous *avez* (ayez) réussi votre examen

— 形容詞 *de* + *inf* が形容詞 *que* + 従属文になる。

Je suis content *que j'ai pu t'aider*. (FB)

Je suis content *de t'avoir aidé*. (FF)

— 近接未来 (*aller* + *inf*) を表すのに助動詞として *vouloir* を用いる。これは他のロマンス語 (ルーマニア語) や、フランス語の方言においてもみられる。

Je *veux* acheter ce livre demain. (FB)

Je *vais* acheter ce livre demain. (FF)

— *savoir* と *pouvoir* の用法

フランスのフランス語では *saavoir* は知識や能力、*pouvoir* は能力、許可、可能性などを表すのに用いられる。ベルギーのフランス語では *savoir* を許可を表すのに用いることがある。おそらく、フラマン語の影響によるものである。

Est-ce que je *sais* (peux) m'en aller?

Je ne *sais* (peux) pas porter ce bagage.

Ce meuble ne *saura* (pourra) pas entrer dans cette pièce.

— *Si* + 半過去の構文が *Si* + 条件法となる

Si j'aurais (avais) de l'argent et du temps, je partirais volontiers pour la France.

—半過去形の乱用

Qu'est-ce qu'il lui *fallait* (faudrait) à la petite dame?

Toi, tu *étais* (serais) le gendarme et moi le voleur.

Sans la présence d'esprit du mécanicien, le train *dérailait* (aurait déraillé).

—接頭辞

動詞の意味を強調するため接頭辞を付加する。

FB

FF

Soulever un lièvre

lever un lièvre

découper un livre

couper un livre

ブリュッセルのフランス語話者は、基層語であるフラマン語の接頭辞 *ver* を動詞（もしくは他の品詞）に付ける傾向がある。

例： oublier - *ver*oublier expliquer - *ver*expliquer

3 語彙と表現

ベルギーのフランス語にはフランスのフランス語では古語 (archaïsme) と見なされ、すでに使われなくなった語彙・表現や、ベルギーのおかれた歴史的背景や政治社会状況などを反映する特有の語 (法) が存在する。

—古語、古風な表現 (archaïsme)

soixante-dix(70), quatre-vingt(80), quatre-vingt-dix(90)はベルギー (スイス、カナダ) では、それぞれ septante, octante, nonante となる。これらの表現はアンシャン・レジーム下のフランスでも一部の地域で使われていた。ベルギーのフランス語では三食の食事を表す言葉は déjeuner (朝食)、dîner (昼食)、souper (夕食) である。この表現は19世紀初頭までは、フランスで広く通用していたが、現在ではそれぞれ petit déjeuner, déjeuner, dîner となる。indaguer (尋問する。調査する), instiguer (扇動する、駆り立てる) clignoteur (ウィンカー), molière (ひもで結ぶ短靴), tailleuse (高級婦人服飾店の縫子) はフランスではすでに古語となり、それぞれ、mener une investigation

(enquête), inciter, clignotant, richelieu, couturière に置き換えられている。

一 造語

造語によりフランスのフランス語と異なるものとして、次のような語彙がある。

郊外に住み都市の中心部に職場を持つ人を指す言葉として、フランスでは banlieu (郊外) から派生した banlieusard が造られた。一方、ベルギーのフランス語では navette (二つの拠点を結ぶバス、電車などの交通手段) から派生した navetteur という言葉が生まれた。amitieus, taiseus, entièreseté はベルギー特有の語彙で、フランスのフランス語 affectueux, taciturne, totalité と同義語である。前者は一般庶民の使う言葉を基にした造語で、後者はラテン語の学問用語からの派生語である。

一 教育、行政、政治分野の語彙

ベルギー特有の教育、行政、政治制度の反映する語彙、表現が数多くある。

a. 教育分野

calepin, carnassière, mallette (cartable),
athénée (lycée), humanité (école secondaire)
élocution (exposé orale), bolque (période d'études intenses)
collège (collège catholique), régent (agrégé de l'enseignement secondaire),
kot (logement d'étudiant), auditoire (salle de cours),
rentrée académique (rentrée universitaire)
professeur ordinaire (professeur titularisé),
professeur extraordinaire (professeur non titularisé)

b. 行政・政治分野

bilingue はフランスでは単に「二言語」を表すが、ベルギーでは多くの場合、特殊な言語状況を反映して「フランス語とオランダ語の二言語」を意味する。
communautariser は名詞 *communauté* から派生した動詞で、フランスのフラ

ンス語には存在しない語彙である。ベルギーが三つの言語共同体に分割された時に造られた言葉である。*commune à facilité* (特別保護措置コミューン)、*flamingant* (フラマン過激主義者)、*wallingant* (ワロン過激主義者)などもベルギーの特殊的政治状況から生まれた言葉である。それ以外に、*échevin* (conseiller municipal), *mayeur*, *maïeur* (maire), *accises* (impôts sur l'alcool), *décumul* (séparation fiscale des revenus des époux) など行政、政治分野の用語には多くのベルジシズムがある。

—ベルギー特有の言い回し

FB	FF
attendre famille (妊娠している)	être enceinte
chercher misère à quelqu'un (人に喧嘩をふっかける)	chercher noise à quelqu'un
ne pouvoir mal (心配無用)	(il n'y a) pas de danger
tirer son plan (難局を切り抜ける)	se tirer d'affaire
tomber faible (気を失う)	s'évanouir
Il n'y a pas d'avance à cela (何の役にも立たない)	cela ne sert à rien

—借用語

ワロン地域のオイル語諸方言からの借用と外国語からの借用がある。オイル語諸方言(主にワロン方言)からの借用語で比較的によく使われる語彙には次のようなものがある。

<i>Cocaille</i> (objet sans valeur)	<i>cumulet</i> (culbute)
<i>flatte</i> (bouse de vache)	<i>gassette</i> (chausson aux pommes)
<i>rawette</i> (petit supplément)	

ゲルマン語からの借用も多いが、その中でベルギーのフランス語にもっとも多く語彙を提供したのはフラマン語である。*blinquer* (briller), *dringuelle* (pourboire), *boentje* (bêguin) はそれぞれ、フラマン語の *blinken*, *drinkgeld*, *boon* からの借用である。*broil* (désordre, rebut), *bræbeler* (bêgayer),

sukkeleir (pauvre type), *zwanzer* (humour, blague), *drève* (une avenue plantée d'arbres), *kermesse* (fête populaire), *minque* (halle aux poissons), *bourgmestre* (maire) なども日常生活でよくつかうフラマン語からの借用語である。

借用には語彙を直接借用する場合と、言い回しの翻訳借用という形をとる場合がある。次にあげるのは翻訳借用した言い回し、表現である。

avoir ruses avec quelqu'un (avoir des ennuis avec quelqu'un)

faire de son nez (faire des embarras)

ne pas savoir de chemin avec quelqu'un (ne pas savoir comment s'y prendre avec quelqu'un)

tenir le fou avec quelqu'un (se payer la tête avec quelqu'un)

以上でみたように、ベルギーのフランス語の特徴はベルギーがおかれた歴史、政治、地理、文化など、様々な要因によって形成された。ベルギーのフランス語とフランスのフランス語の違いは、フランス人とベルギー人の意志疎通を大きく妨げる程のものではない。それにもかかわらず、一部のベルギー人たちはパリのフランス語を「規範」とみなし、自分達は「正しいフランス語」を使っていないのではという「言語不安定」*l'insécurité linguistique* に陥ることがある。フランスのフランス語に対するある種の言語コンプレックスである。しかし、ベルジシスム *belgicisme* はベルギーのフランス語の特徴を表すものであって、その「言語的劣等性」を意味するものではない。言語の多様性は文化の多様性に結びつく。したがって、ベルジシスムはフランス語をさらに豊かな言語にするものと捉えるべきであろう。

終 わ り に

ベルギーにおいて少数派の言語であるフランス語は、長い期間にわたって上流階級の言語として君臨し、その優位が揺るぎないものであった。フランス語は、フランス語話者が、政治、経済、文化などの分野で、自らの支配的地位を

維持するための重要な手段であった。フラマン語は標準語化が遅れたため、大多数の住民の言語であるにもかかわらず、「劣等言語」の不当なレッテルをはられ、その話者は「二等市民」の地位に甘んじなければならなかった。したがって、フラマン人にとって言語問題は民族アイデンティティの問題であると共に、政治的権利獲得の問題と密接に関連してきた。建国以来、ベルギーは言語問題を解決するため様々な試みを行い、最終的には単一国家から連邦国家へ再編することを選択した。ベルギーは一地域一言語の原則に基づく言語政策を実施している。しかし、「ヨーロッパ言語憲章」は、少数派の言語と文化を認めその振興発展を奨励することを定めている。ヨーロッパ揺籃の地であるベルギーが、その首都として言語問題にどのように向き合っていくのか興味深い。

註

- (1) 近山金次訳『ガリア戦記』(岩波書店、1992年) 23頁
- (2) 森田安一編『スイス・ベネルクス史』(山川出版社、1998年) 169～171頁参照
- (3) レインス・フレデリック、河崎 靖『低地諸国(オランダ・ベルギー)の言語事情』(大学書林、2000年) 91～96頁参照
- (4) Daniel Blampain, Daniel (Sous la direction de) 1997, *Le français en Belgique*, p. 260
- (5) Daniel Blampain, Daniel (Sous la direction de) 1997, *Le français en Belgique*, p. 243
- (6) ジョルジュ＝アンリ・デュモン、村上直久訳『ベルギー史』、104頁。フランス語の原文は次の通り。 *Vous regnez sur deux peuples. Il y a, en Belgique des Wallons et des Flamands; Sire, il n'y a pas de Belges.*
- (7) 石塚さとし『ベルギー・つくられた連邦国家』(明石書店、2000年) 68～69頁参照

参考文献

- 1) 石塚さとし『ベルギー・つくられた連邦国家』、明石書店、2000年
- 2) カエサル著、近山金次訳『ガリア戦記』、岩波書店、1992年
- 3) ジョルジュ＝アンリ・デュモン著、村上直久訳『ベルギー史』、白水社、2000年
- 4) B. B. ドナルドソン著、石川光庸・河崎 靖訳『オランダ語誌』、現代書館、1999年

- 5) 森田安一編『スイス・ベネルクス史』、山川出版社、1998年
- 6) モーリス・ブロール著、西村六郎訳『オランダ史』、白水社、2003年
- 7) レインス・フレデリック、河崎 靖『低地諸国（オランダ・ベルギー）の言語事情』、大学書林、2000年
- 8) Daniel Blampain, Daniel (Sous la direction de) 1997, *Le français en Belgique*, Louvan-La-Neuve
- 9) Francard, Michel, "Entre Romania et Germania: La Belgique francophone" in *Le français dans l'espace francophone*, Paris, Editions Champins, 1993
- 10) Lagerqvist, Hans, 2001, *Introduction au français hors de France*, Denmark, Departement of Languages and Intercultural Studies, Alborg University
- 11) Lebouc, Geroges, 1998, *Le belge dans tous les sens*, Paris, Editions Bonneton
- 12) Mercier, Jacques, 1990, *Le dictionnaire franco-belge, belgo-français*, Bruxelles, Glénat
- 13) Tritter, Jean-Louis, 1999, *Histoire de la langue française*, Pairs, Ellipses
- 14) Walter, Henriette, 1988, *Le français dans tous les sens*, Paris, Robert Laffont Louvain-la-Neuve, Duculot